

東京バッハ合唱団 月報

[第 545 号] 2007 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel:03-3290-5731 Fax:03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR,
TOKYO

Monthly Newsletter No.545
November 2007

5-17-21-101 Funabashi,

「モテット」で、創立 45 周年の成果を・・・

練習量も例年を大きく上回った一年

大村 恵美子

今年も 11 月となり、年をもうすぐ終えようとしています。「時のたつのが早い」と嘆く人の多いなかで、「一日って長いなあ、一年って長いなあ」という実感に感謝しつつ、ひごろ暮らしている私です。

20 歳代のころには、読んでも読んでもほんの僅かをかじることしかできない膨大な書物、学んでも学んでも追いつかない世界の真理をまえにして焦り、悲観的にもなった時期がありました。合唱団をはじめから、対象であるバッハの作品そのものが、一生かかっても見通せないほどの質量で、日夜、迫るものでした。

しかし、同志とともに、焦りをおさえながら、経済状態と強引に妥協させつつ、進行のペースを徐々に馴らして行って、45 年がたちました。

いよいよ、創立 45 周年。「マタイ受難曲」に明け(3 月)、「モテット」に暮れる(11 月)プログラムを掲げて、猛然と練習がおこなわれました。「マタイ」のほうは、私自身、1982 年(創立 20 周年)に私の提唱で始めたときとちがって、今回は、なるべく団員側の自主性を重要視するよう心がけました。昨年夏には、休暇とすべき 8 月の、全土曜日を返上して、野尻湖合宿もせず、暑い東京で長時間のつめこみ練習もしました。

「マタイ」のような大曲を仕上げるためには、満足な段階に達することはありえないけれど、結果として相当な評価をいただくことになりました。そのうえ、6 月にも、ふたたび「マタイ」の、松山でのドイツ語公演に加わるという、責任ある課題にも挑戦。これは、必ずしも松山バッハ合唱団の方々のレベルに至らず、足手まといになった感もあるのではないかと、恐縮しているのですが、こちらとしては、フライブルクと松山との文化交流という、広大な体験に参加させていただいたことを、深く感謝いたしました。ここからまた、来たる 2009 年に、フライブルク、松山、東京の出会いが実現されるよう、いまは夢想から現実への努力をしているところです。

さて、「マタイ」の騒ぎが終るか終らないかに、こんどは 11 月の「モテット」に直面することになりました。モテットのむずかしさは、「マタイ」のそれとはまた違ったきびしさで、初めての方々は、ちょっと愕然

とされたかも知れません。器楽や独唱なしに、たてづけに合唱でつくり上げる 10 分、20 分。優にカンタータ 1 曲分です。

モテットの重要性は、当合唱団では、早い時期からマークして、何回も定期演奏会でとりあげ、モテットだけのプログラムを組んだり、何回にもわたって 1 曲ずつ連続して加えたり、あちらこちらの臨時公演、またドイツ巡演のたびごとに、かならずくり返してきました。いわば、私たちの長年蓄えてきた財産で、モテットを知った団員が、はじめは困難でも、歌いこむうちに大好きになり、つぎの演奏機会を心待ちにするようになる過程を、ずっと見てきました。

今回は、新しく入った団員も多く、またいつもは 12 月におこなわれる定期演奏会が、会場探しの都合で 1 ヶ月早まったこともあって、心理的な焦りも感じたのではないのでしょうか。私は、「マタイ」以降、過密なスケジュールが常態化することを懸念して、野尻湖合宿後は、夏休みをきちんと守って、身体をととのえるよう奨めたのですが、それでも有志の練習が続けられたようです。

バッハの合唱を日常生活に生かす、というのがこの合唱団の本来の方針ですから、一時的な熱狂でつめこんで、生活に支障をきたし、ポッキリ折れてしまうことが、私には心配なのです。

しかし、実際には、モテットのむずかしさは、合唱技術としては「マタイ」以上で、よほど確立した自覚がないと、二重合唱(8 声部)などの厚いジャングルの途上で迷子になってしまいます。それを、あえて強調しなかったのは、大半をしめるベテラン団員たちの、これまでの積みかさねに、私は大きな期待と信頼を、内心寄せていたからでした。

ただ、練習量の多い割に、思いのほか内容の把握に手間どっているのは、なぜだろうかと、しばしば考えさせられることもありました。霊と肉(モテット第 3 番の主題、「ローマ人への手紙」第 8 章)、というような形而上学的な次元へのへだたり、晴朗な喜びに突入しきれない、不透明な現実感覚など、なにか、個々の団員というより、社会全体の、バッハの宇宙をストレ

ートに受けつけない、鈍く重苦しい空気が、わざわざしているのではないか、とも思いました。

それだからこそ、むしろ私たちはバッハに透徹して、するどく明かるく希望の世界を、ステージで聴衆の皆さんと共に、築き上げなければならないのではないのでしょうか。もやもやと停滞する自己の現状を吹きつて、理想を現出させる、これが芸術の本領なのです。

本番の1ヵ月前になり、やっと、歌う者とバッハとの交流が、自由なものになってきたところです。自己にこだわり、現実にかかわる「ぼんのう」(私は、テキストに出てくる「肉」の語を、「ぼんのう」または「欲望」におきかえてみれば、と言いました)から脱して、虚心坦懐にバッハの宇宙に参入し、聴衆をもそこに引き入れてゆく。これが私たちの使命です。

ウルトラCのモテット2曲の間に挟むクリスマスのカンタータには、誰が歌っても聞いても、なごやかで、豊かで、広々とした境地にひたれる《もろびと シバより来たり》を選んであります。決して易しいカンタータではありませんが、歌っていてしあわせを感じる音楽ですから、むずかしいモテットにとりくむ団員たちにとっても、オアシスとなっているでしょう。

こういう次第で、この一年は、まことに練習にはげんだ、充実した年でした。来たる11月17日の本番が、

第101回定期演奏会 ご案内

創立45周年記念公演 「バッハのクリスマス音楽」

- ・モテット第3番《イエス よろこび》
- ・カンタータ第65番《もろびと シバより来たり》
- ・モテット第1番《歌え 主に向かい 新たな歌》

日時：11月17日(土)

開演：午後4時(開場3時30分、終演5時30分予定)

会場：中央会館ホール(銀座プロッサム)

(銀座2-15-6、地下鉄有楽町線「新富町」、日比谷線・浅草線「東銀座」下車)

テノール 鳥海 寮、バス 佐々木直樹

オーケストラ 東京カンタータ室内管弦楽団

オルガン 草間美也子

指揮 大村恵美子/橋本眞行

チケット：3000円(全席自由席。当日券もあります)

事務局までお申し込みください。郵便振替用紙を添えてお送りします。

団友・後援会員のみなさま

定期演奏会の「招待状」は、お手許に届いていますでしょうか？

今回は、会場も広く、あらかじめのお申し込みなしに会員のみなさま全員に「招待状」をお送りいたしました。

ご確認のうえ、ぜひともご来聴いただけますよう、お誘い申し上げます。

そのことを立証してくれるような成果をもって終わりますよう、ただ祈るばかりです。「マタイ受難曲」を来聴されて、たくさんの讃辞をくださった皆さま、ぜひこの45周年記念公演の輝かしいプログラムにもご参加くださいますよう、心よりお待ちしております。

(東京バッハ合唱団 主宰者)

宮田光雄氏の「キリスト賛歌 諸宗教の対話ということ」を読んで

『宮田光雄集 聖書の信仰』第3巻「聖書を読む」(1996年、岩波書店)より

大村 恵美子

かねがね、書物や情報によって宮田光雄先生に尊敬を寄せていた私が、初めて先生にお目にかかったのは昨年3月21日、信濃町教会でおこなわれたボンヘッファー生誕100年記念の会においてでした。私たちがバッハのカンタータ第192番《ああ感謝せん 神に》をうたい、先生が記念講演をなさいましたが、そのときのご様子で、とても豊かな感受性をもって聞くものの心に迫る、先生のお話、一般の講演では味わえない鮮烈な印象を受けたのでした。

この夏、仙台でのある集会で先生とことばを交わす光栄を得、その後もたびたび通信がゆき交って、私たちの3月の《マタイ受難曲》演奏のCDをお聴きくださった感想にもふれながら、下記のおたよりをいただきました。

(….)「月報」10月号を拝見しました。巻頭のボイアーレ氏による「訳詞演奏 バッハの音楽言語の普遍性を証示」の文章こそ、まさに小生の思いに一致するものでした。「異質の言語がバッハの音楽にかくもしなやかに適合する」とは、まことに的確な指摘だと思います。もっとも小生自身は、多少ドイツ語の声に耳慣れしているせいか、同氏のいう「母音と子音」についての言及にも深くうなずかされました。

かつてクレッパの讃美歌について短いエッセイを書いたこともあり、それを読んだ讃美歌委員会の事務局から「讃美歌21」の訳詞づくりを頼まれ、音声との調整などまったく自信のない人間としては、断乎、固辞したことがあります。

それだけに、今回の《マタイ受難曲》の訳詞づくりの御苦心と工夫の跡がしのばれ、深く敬意を表する次第です。(….)

また、月報での私の関心事にも心を寄せられて、「諸宗教の対話ということ」という内容が、全体の結論的

な位置におかれているご本を、数あるご著作のなかから、選んでお送りくださいました。出会われる相手に適切な関心と対処を引きだされる、先生の愛情深いお人柄については、多くの知人からも心服が伝えられています。

私も、この機会に、つたなく簡粗ではあっても、ぜひ多くの方々に、先生のお考えの一端でもご紹介できたらと思い、以下に読後感をまじえながら、御著からの引用をさせていただきます。

私がこれまでに月報で述べてきた論点の多くが、より判然と説かれていて、まことに意を強くしましたが、様々な批判的観点からキリスト教に言及されているものの、私の浅い思考からみると、はるかにキリスト教信仰の根強さが基調となされていることは否めず、また当然といえましょう。このまま、他宗教の人びとの前に提出された場合、即座に、やっぱり自教擁護、という感じで拒否されるのでは、と愚考したくなる部分もありましたが、逆に、これほどの強さをもって、相手側の宗教擁護もつきつけられることが、相互継続の基盤にはちがいない、と思い直したりしました。とにかく、あらゆる面で広い視野からの展開で、私のような者でも、将来がより希望的になってきました。

「第3巻へのあとがき」から、ご自身のコメントに入ってゆきます。

この巻の中で著者によって取り上げられた旧約聖書の 天地創造、楽園物語、ヨナの物語、新約聖書の 放蕩息子と 善いサマリア人 のたとえ話、フィリピ書・コロサイ書中の キリスト讃歌 などの「テキスト解釈を踏まえた上で、さらに文化人類学や精神分析学、文学作品、思想史などの素材とも組み合わせ、信仰論とともに現代に生きる人間の在り方を平和や共生の問題にいたるまで 考えてみようとするものです。」(p.304)

「宗教間対話を通してキリスト者は、他の諸宗教や他の文化圏の人びとから、さまざまの学びをすることができるはずでしょう。」(p.305)

「日本の風土では、父性原理による考え方を積極的にとり入れること、少なくとも、母性原理にたいする均衡の回復をはかることが必要ではないでしょうか。」(p.307)

「今日、日本社会の一部でよくみられる主体的な個にたいする懐疑が、いったい、何に由来するものなのか、あらためて問い直してみる必要があります。そうした批判は、ほんとうの意味での真の個性にもとづく生き方には妥当しないのではないのでしょうか。(…)たとえば支配や抑圧、さらに競争や搾取などの現象は、個人がほんとうの自律性や自立性をもちえないところから由来するのではないのでしょうか。(…)その結果として、私利私欲を手放しに主張して攻撃的・搾取的ともなるのではないのでしょうか。」

(p.308)

あとがきからの引用だけで、こんなに多くなってしまいました。せめて最終部分の第6章「キリスト賛歌 宗教間対話」(p.293-303)の中からだけでも、ぜひお伝えしたいところを、とっていたのですが、皆様が直接お読みくださることを期待して、ここまでで断念させていただきます。

いまは、情報過多のなかでも、とくに悲観的なニュースばかりが溢れていますが、これでは、生まれてきた子どもたちに、投げやりになるのをやめろ、死んではいけない、などというおとなのほうが、無理無体というものです。

『ニューズウィーク日本版』の最新号の1ページ(「イスラムの仲良し大作戦」10月24日号、p.28)のコピーを同封させていただきますが、どうせこんな泡沫のような記事にしがみついて、というご批判は承知で、私は裏切られることがあっても、自分が賛成できる方向にそったニュースは、なるべく周囲に広めたいと思っています。

今でも悔いとともに思い出す、似たような事態がありました。アメリカがイラクに攻め入るまえに、イスラム圏側からのアクションはないものか、また、イギリスやヨーロッパ諸国がブッシュに寄り添ったのも、アメリカの突出をけん制する底意があつたのではないのか、と様々に期待しましたが、そういう方向づけを、世界中の人たちが口にして公に伝え合うことで、情勢が変わりうる場合もあったのではないか。ヨナの話のように、好ましい民衆の変化には、神様さえも動くことがあるというのです(宮田氏同書、第3章「神のユーモア=ヨナの物語」参照)。

学者でも評論家でもない私の話は、すぐに現実のほうに流れて、著者に失礼なことになるのではないかと、の危惧もあるのですが、私からすれば、10年も前(1996年刊)に発表された宮田先生の御著作が、9.11を経験し、イラク戦争に手を焼く今日の世界の現状に対してもまったく活きた言葉となつて、深いところからの読者の反省と、そして現実への責任ある関与をうながしておられるように思えますので、宮田先生への応答としてそれほどの外れではないのではないかと、考えた次第です。

この《マタイ受難曲》の年に、もうひとつ、私がお伝えしたかったことが残っていましたので、余白のきたこの号で、以下にそれを述べさせていただきます。

「神殿を壊してみよ。3日で立て直してみせる」

これは、ヨハネ福音書2:19にあるイエスの言葉で、エルサレムの神殿から商人を追い出したイエスに、人びとがつめ寄ったときの答えです。「それでユダヤ人たちは、この神殿は建てるのに46年もかかったの

に、あなたは3日で立て直すのか」と言った。イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。(ヨハネ2:20,21)

《マタイ受難曲》の第33曲では、この時のことを思い出して、最後の2人の証人が訴えます(アルト・テノール二重唱)。また、イエスが十字架につけられると、群衆は彼にむかって「神殿を打ち倒し、3日で建てる者、神の子なら自分を救ってみる。そして十字架から降りてこい」と罵ります(第58曲b)。《マタイ》を練習している間中すでに、私は、ここにあるイエスと民衆との深い溝を、しきりと感じていましたが、その後何ヵ月たっても、このことが日に日に痛切に、現在の問題として私の心のなかでふくらんでくるようになっていきます。

まず、イエスとユダヤ教、ユダヤ教とキリスト教、あるいはイスラム教、そしてイスラエル民族とアラブ民族、等、歴史を重ねるごとに、どうしてもなく絡み合っ、解決を見出せないほど先鋭化した、中東の現状が、私たちの毎日を暗くおおっています。

しかし、イエスは、どんなに壮麗なイェルサレムの神殿でも、「1つの石でもここで崩されずに他の石の上に残ることはない」(マタイ24:2)と、神殿の崩壊を予告した(自ら壊すと言ったのではない)。

その後の歴史は、イェルサレムの神殿が破壊された後も、これをめぐって何重もの奪い合いがつづき、今日にいたるまで、その所属は決着がついていません。このすべての歴史をひっくり返して、人間の不明、愚かさが、浮き彫りにされています。

イエスは、バベルの塔と同じく、イェルサレムの神殿も、神をまつために建てたものでありながら、人間の争いの巣窟となることをみて、神はそんなところに鎮座しない、天国はそんな地上に見えるものではない、神を求め、平和を求める人びとの心の間に宿るのだと教えたのです。既得権とされる約束の地に攻め込み、人びとを追い散らし、国境の小島をめぐっていがみ合い、国益、国益としたり顔に叫びあい、私たちは、1日たりとも地球全体の滅びを気づかうことがありません。ハコモノにとらわれて、そこに働く神と人間の共生に気づかない人間たち。徹底的に出直して、21世紀をつくり換えなければ!

バッハ教会カンタータ [日本語訳詞つき] 楽譜全集
＜新刊6曲＞発売中

カンタータ第52番(悪しきこの世よなれを頼まじ) 1200円
カンタータ第65番(もろびとシバより来たり) 1500円
カンタータ第67番(留めよ心に主イエスを) 1400円
カンタータ第102番(主の目は信仰を見たまう) 1500円
カンタータ第169番(神にのみわが心献げん) 1300円
カンタータ第182番(あまつ君を喜び迎えん) 1600円
価格は、国内特価です。お申し込みください。

柳元 宏史

連載：全部おすすめ50曲選!! <その9>

カンタータ第192番(ああ感謝せん 神に)

10月31日は、宗教改革記念日である。1517年のこの日、宗教改革者マルティン・ルターが「95個条の提題」をヴィッテンベルク城の教会の扉に打ちつけたことを記念している。

彼は大学で法学を学んでいたが、近くで起こった落雷がきっかけで、信仰の道に進むことを決意する。なんと劇的だ。進歩的な家族の反対を押し切って、きわめて中世的・禁欲的なアウグスティヌス修道会に入会する。しかし修道会での生活をとおしても、自分の内奥にあるぬぐい去れない罪と向きあい苦しむ。苦しみながら神学教師として情熱的に聖書を研究するなかで、1515年「ローマ書」の講義をとおして、「正しい者は信仰によって生きる」という一節に出会い、人は聖書をとおし、ただキリストを信じる「信仰」によってのみ救われる、ということを確認する。

その当時、贖宥状(免罪符)が教皇の名のもとに販売され、聖書など読んだことのない貧しい民衆はこぞって購入していた。ルターは、貧しいものから最後の1枚のコインまでもぎとっている教会の姿に憤り、「95個条の提題」を掲げたのである。この日が記念日となったのは、この「提題」が歴史的に大きなインパクトを与えたからである。当のルターは、それほど大きな事態に展開するとは意識していなかったらしい。

さて、この曲は宗教改革記念日の礼拝で用いられたとされ、神への心からの感謝と祈りが、ルター派の信仰に生きたバツハらしい、魂に響く旋律で表現されている。ああ奇しきみわざ主は為したもう。

ルターは「提題」が、かくも大きな波紋となって拡がり、自らが改革者になろうとは夢にも思わなかっただろう。そのように、神は思いがけない展開を用意なさっているなあ、と感ずることが、私にもある。

つい4年前には、自分が牧師になるための勉強を始めるなど、まったく想像もしていなかった。そしてこの合唱団に加えられたのも不思議なつながりによるし、歌う喜びを再発見できたことは、何にも替えがたい身震いするほどの喜びである。ああ感謝せん 神に。

いよいよ定期演奏会が近づいてきた。モテット《イエスよるこび》は「ローマ書」の内容を的確に扱っている。宗教改革の原点を思い起こしながら、ルターと同じく、純粹で深い信仰を情熱的に音楽生活に注いだバツハに思いを馳せて、舞台に立ちたい。

(やなぎもと・ひろし。団員：バス)

CD バツハ・カンタータ50曲選[第20巻]に収録。
S 光野孝子, B 渡邊明, 橋本眞行指揮・東京カンタータ室内管弦楽団・2005年録音(第98回定演)

<再録>

日本のバッハ運動 アイゼナハでの東京バッハ
合唱団

第2回ドイツ演奏旅行(1988年8月)のアルバムを見直していたら、つぎのような新聞評があったのを思い出しました。ひごろ練習で指摘される諸点が、本番でみごとに聴衆に認められた証言として、自信を深めていただけるよう、また目標をさだめる勇気づけのためにも、ここに再録してみます。(1988年8月19日、アイゼナハ・ゲオルク教会での演奏について)

(・・・)演奏解釈の歴史にまつわる諸問題は、ここでは本来まったく簡単なことなのだ。バッハの作品が当地で2世紀にもわたって経験しなければならなかった(あるいは経験しえた)解釈の変遷というものを、この日本の客人は、一緒に、あるいは後を追って実行する必要がなかったのであり、その代りに最近数十年間の中部ヨーロッパにおける解釈理解に直結することができるのである。

そこで、すべてが音楽的で流暢であった。リタルダンドや荘重な音の引き延ばしなどは見送られた。スマートで弾力的な合唱の響きはそのような解釈にふさわしいものだった。合唱指揮者大村恵美子は、演奏に際して、細部をゆるがせにすることなしに、大きな、数小節にわたる弧を描いた。そうすることによって、バッハにはまさに典型的である、あの一見こともなげなスウィングと、音楽の途絶えることのない流出とに達した。しなやかな合唱の響きは、さし出がましくもなく、また重苦しくもなく、羽のように軽やかでしかも一体となっていた。時として、ソプラノが露出する位置で、イントネーションの混濁があった。明らかに強い声の負担からくる結果である。

作品はほとんどドイツ語で歌われた。しかし、日本語で歌われた作品 カンタータ《とどまれ われらと》BWV6 も魅力に溢れていた。作品の本質にいたる歌手たちの通路が、ここでは直接的だったからである。(・・・)

イエナ Glaube und Heimat 紙, 1988年9月11日

第101回定期演奏会 ご案内

創立45周年記念公演 「バッハのクリスマス音楽」

- ・モテット第3番《イエス よろこび》
- ・カンタータ第65番《もろびと シバより来たり》
- ・モテット第1番《歌え 主に向かいて 新たな歌》

日時: 11月17日(土)

開演: 午後4時(開場3時30分、終演5時30分予定)

会場: 中央会館ホール(銀座プロッサム)

(銀座2-15-6、地下鉄有楽町線「新富町」、日比谷線・浅草線「東銀座」下車)

テノール 鳥海 寮、バス 佐々木直樹
オーケストラ 東京カンタータ室内管弦楽団
オルガン 草間美也子
指揮 大村恵美子/橋本眞行

チケット: 3000円(全席自由席。当日券もあります)
事務局までお申し込みください。郵便振替用紙を添えてお送りします。

団友・後援会員のみなさま

定期演奏会の「招待状」は、お手許に届いていますでしょうか?

今回は、会場も広く、あらかじめのお申し込みなしに会員のみなさま全員に「招待状」をお送りいたしました。

ご確認のうえ、ぜひともご来聴いただけますよう、お誘い申し上げます。